

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2018 水町 勇一郎

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



朝日講座：「職場」という「居場所」  
(2018年11月16日)

# 「働くこと」の意味と「働き方改革」

東京大学社会科学研究所  
水町勇一郎

# あなたはどちらかというどっち？

- Aさん 「仕事が生きがい。なるべく残業するなど上司からいわれるけれど、仕事は楽しいし、遅くまでがんばって企画が通ったときの達成感は何ものにもかえがたい。家族と過ごす時間も大切だけど、仕事をがんばって、いい給料をもらって、それがあってはじめて、家族のことを考えることもできる。」
- Bさん 「趣味が生きがい。最近までは子どもの少年野球のコーチをして子どもといっしょに楽しんでたけど、子どもが中学生になって少年野球を抜けたので、今はフットサルのチームに入って、フットサルにはまってる。仕事は最低限やって、残業なしで定時に帰っているし、会社も自分のことをそういう人だと思っている。」

# 「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

## ◎古代ギリシャの「労働」観：

○働くこと(必要に迫られて行う物質的な諸活動)

＝「不自由」で「卑しい」活動

○真に「人間的」で「自由」な活動とは？

＝「真」・「善」・「美」

# 「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

## →キリスト教(ローマ帝国下で発展したカトリック)の「労働」観:

『神は言った。「園の中央に生えている木の実だけは、食べてはいけない」と。

イヴがみると、その木の実はいかにもおいしそうで、賢くなるようにそそのかしていた。イヴは実をとって食べ、それを渡されたアダムも食べた。

その日、風の吹くころ、神が園のなかを歩く音が聞こえてきた。……

アダムをみつけた神は言った。「取って食べるなといった木から食べたのか。」

アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

神はイヴにいった。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。」

神はアダムにいった。「お前は女の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。』

(旧約聖書『創世記』第三章より〔新共同訳〕参照)

# 「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

## →宗教改革(キリスト教プロテスタント)の「労働」観:

「神はアダムに、いたずらに時を過ごすことのないようにと、パラダイスで植え、耕し、守る仕事をお与えになった。これはまったく自由な行いであったし、ただ神の御心にかなうことのためになされた。・・・ただ、神の御心にかなうようにと、このような自由な行いをすることを命じられているのである。」(マルチン・ルター『キリスト者の自由』第二二より[徳善義和訳]参照)

「もし彼が、彼の身分や職務の中に留まり、求められていることを行うならば、彼は悪い木ではありえない。・・・神が命じられている行いは、人が決して悪と呼ぶことのできない価値を持つに違いないからである。」(マルチン・ルター『「山上の教え」による説教』聖マタイの第七章より[徳善義和・三浦謙訳]参照)

# 「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

→○プロテスタントが広がったアメリカの「労働」観

cf. マックス・ヴェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波書店、1989)

○カトリックの影響がなお強く残っている国々の「労働」観

# 「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

## ◎近世（江戸時代）日本の「労働」観：

「家業」（←日本独特のイエの理念との結びつき）

○家族の生活のための「生業（なりわい）」の側面

○社会（世間）から与えられた分を果たす「職分」の側面

← ・荻生徂徠の「全人民役人」論

・石田梅岩の「四民の職分」論

→「家族（イエ）のため、社会のために働く」日本人の意識

「準イエ」としての「企業共同体」

→いま、その意識はどれだけ残っているのか？



# 「働くこと」の意味と課題

## ◎「働くこと」の意味

○働くことの「社会性」と「経済性」(=喜び)

○働くことの「他律性」と「手段性」(=苦しみ)

→これらの複数の側面があること、他人は自分とは違う労働観をもっている可能性があること、自分の労働観は社会から無意識のうちに押し付けられているかもしれないことを認識することの重要性

# 「働くこと」の意味と課題

◎これまでの日本では、「働くこと」の「喜び」としての側面が重視されてきた。かつ、それが企業共同体という「集団」と結びついて展開されてきた。

→「働くこと」に内在する「他律性」や「手段性」が軽視され、働いている「個人」が自分自身の存在や目的を見失う事態が社会的に広がっている（過労死・過労自殺問題、私的生活の軽視など）。

cf. エミール・デュルケーム（宮島喬訳）『自殺論』（中公文庫、1985）：「集団本位的自殺」

# 「働くこと」の意味と「働き方改革」

◎ではどうするか？—法律によるルール作りの必要性

○働くか、働かないかは個人の価値観・判断に任せる？

→・個人の自由な判断・決定が他人に迷惑をかけていること  
はないか？

・そもそも個人で合理的な判断ができているのか？

○法律によってルールを作り、日本企業の「働きすぎ」の慣行や意識を変えていくことが必要ではないか？

→「働き方改革」

# 「働くこと」の意味と「働き方改革」

## ◎「働き方改革」のポイント

○「働きすぎ」を是正するための上限時間の設定

＝少なくとも生命や身体に危険を及ぼすような働き方はやめよう

○「働きすぎ」でない働き方にも均等・均衡待遇の保障

＝非正規労働者（短時間労働者、有期契約労働者、派遣労働者）で

あっても実態に見合った公正な処遇を受けられるようにしよう

⇒さまざまな環境や状況にある人が、その希望に応じて、それぞれの

潜在能力を発揮できるような公正で活力のある社会を実現しよう！

cf. アマルティア・セン（池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳）『不平等の再検討－潜在能力と自由』（岩波書店、1999）：潜在能力（Capability）アプローチ

# グループワークテーマ

日本において「職場」を居場所とすることのプラスの側面とマイナスの側面を挙げ、これからの日本において「職場」をどのようにしていくことが望ましいか考えなさい。